

だけ

=>水・空気等のような自然と同様の無償の役立ち

S.635-636 要因④：前貸資本の大きさ

所与の搾取度の下、

剰余価値の総量←搾取される労働者の数←資本の大きさ

第5節 いわゆる労働元本

S.636 資本の弾力性

個別資本については

- ・ 資本は固定的な大きさのものではなく、社会的富のうちの弾力的な一部分であり、また剰余価値が収入と追加資本とに分割されるにつれて絶えず変動する一部分
- ・ 資本に合体される労働力、科学、および土地は、資本そのものの大きさにはかかわりのない作用範囲を資本に許すような、資本の弾力的能力を形成

S.636-639 古典派経済学の誤り

- ・ 社会的資本を、固定した作用度を有する固定した大きさのものとして把握する古典派経済学の偏見。「ベンサムのパラドクス」
- ・ 可変資本を一つの固定した大きさのものとして描くため
；いわゆる労働元本=可変資本の素材期実存=可変資本が労働者のために代表する生活手段の総量を、社会的富のうちで、自然の鎖に縛られて超えることのできない特殊部分として
- ・ 生産手段を運動させるためには、一定総量の生きた労働が必要→技術学的に与えられている
しかし、この労働量を流動させるのに必要な労働者の数は搾取度につれて変動するし、労働力の価格も与えられていない

*質問点等

も古典派に特有の意味がある

- S.636 「社会的資本」とは、総資本のことか？
- S.636 「われわれは、資本主義的生産の諸制限を、したがって、社会的生産過程の純粹に自然発生的な一姿態を前提しているので、現存の生産手段および労働力によって直接的かつ計画的に実現されうるいっそう合理的結合は、いずれも度外視した。」
いっそう合理的「社会的生産過程」の姿態とは。「直接的」の意味。

『資本論』第22章 剰余価値の資本への転化

第4節 剰余価値の資本と収入とへの比例的分割から独立して蓄積の規模を規定する諸事情——労働力の搾取度、労働の生産力、充用される資本と消費される資本との差額の増大、前貸資本の大きさ

S.625-626 前提：剰余価値が資本と収入とに分裂する比率は所与
蓄積の大きさ ← 剰余価値の絶対的大きさ ← 剰余価値の総量を規定する諸事情

S.626-631 蓄積の大きさを規定する要因①：労働の搾取度

- ・ 賃金の労賃の価値以下への引き下げ
→一定の限界内で、労働者の必要消費元本を資本の蓄積元本に転化
- ・ 労働者の必要消費元本に対する直接的略奪 (S.626-629)
- ・ 労働力のより高度な緊張 (S.629-631)
→ 資本は、富の二つの原形成者すなわち労働と土地とをみずからに合体することによって膨張力を獲得
→ これより、一見すると資本自信の大きさによって定められた限界を超え、自己の蓄積の諸要素を拡大することが可能

この資本観
は、C 707
717

S.631-634 要因②：社会的労働の生産性の程度

- ・ S.631 労働生産力の上昇による蓄積の加速化
労働生産性上昇 → 労働者の低廉化 → 剰余価値率の上昇
； 同じ可変資本価値がより多くの労働を運動させ、
同じ不変資本価値がより多くの生産手段になって現れ、より多くの生産物形成ならびに価値形成者、労働吸収者を提供
- ・ S.631-632 原資本（すでに生産過程にある資本）への反作用
労働手段の死滅と代替過程で、科学・技術の発展とともに労働生産力の増大が起きると、より効率の高い、高性能にしては安価な労働手段が旧式のを代替
- ・ S.632-634 労働が生産物に移転する旧資本価値への影響
労働生産性に比例して増大（例：イギリス紡績工と中国人紡績工）
絶えず膨張する資本価値を、つねに新しい形態で維持し、永久化する労働のこうした自然力は、資本の自己維持力として現れる

相対的剰余価値の増大
について論及してはいる
けど？

S.635 要因③：充用された資本と消費された資本との差額の増大

- ・ 資本の増大
→ 建物、機械設備等のように、繰り返される生産過程のなかで全範囲的に機能する労働手段の価値量が増大
→ 他方、それらの労働手段は漸次的にのみ摩損；価値を一部分ずつ失う